

戦争の記憶

島田市金谷遺族会 大久保昌彦

私は昭和12年11月18日生まれ、今年85歳、島田市金谷に生まれました。父との一番の思い出は、昭和16年12月8日の真珠湾攻撃、夜、町いっばいの提灯行列に父と参加したことです。

父は靴の修理、販売を商いとする大井海軍航空隊の御用商人でした。昭和17年4月に開港し、現在の牧之原東名インターチェンジの近くにあった大井航空隊へ、毎日3人の職人と靴の修理に出掛けていましたが、昭和19年赤紙一枚で召集され、静岡連隊に入隊、中国へ派遣されました。終戦を無事迎えました。10月14日、中国から引き揚げ途中マラリアに罹り29歳で亡くなりました。

戦争中、昭和20年に入ると東京の大空襲で一晩に10万人以上が犠牲となり、県内でも浜松の艦砲射撃、静岡の空爆等で多くの犠牲者が出ましたが、母も昭和20年7月30日、金谷町医王寺に落ちた爆弾の破片が腹部に当たり、私の目の前で倒れ、そのまま3年6ヶ月寝たきりになった後、死亡してしまいました。

私は小学五年、妹は二年生でした。家族をなくし、終戦後で食べ物もなく、毎日近くの小川でセリ、魚をとってなんとか生き延びました。当時は、国や町の助けもなく、父の遺品の衣類を持って農家へ食糧の交換をお願いに行きましたが、ほとんどの農家で門前払い、帰りにあぜ道でイナゴを獲って食糧にし、今思うと妹とよく生き延びたと思います。

私は、昭和28年3月に中学校を卒業し、愛知県吉良に靴の修理見習いとして5年間無給で働き、20歳で年期明けとなり故郷の金谷に戻りました。戦争で両親を亡くし、家もなくなってしまった中で、どうしても元の姿に戻りたいと決意し、勤めに出るとともに、靴やアクセサリーのお店も2軒持ち、東海パルプ、東海フォレストに30年勤務して、三足のわらじ計画を立てて無我夢中で頑張り、今では私も妹も家族を持ち、子や孫に囲まれ幸せにいらしているが、当時は戦争で240万人が戦死し、都市への無差別攻撃もあり、両親を亡くした戦争孤児は12万人にも及んだと聞いている。

戦争のない平和な時代を。